青春無明

高史明

径書房

高史明（コサミョン）

1932年，山口県に在日朝鮮人二世として生まれる。
成長後，東京に出て，さまざまな職業につきながら政治活動にも参加，10余年の独学を経て，最初の長編小説「夜がときの歩みを暗くするとき」を『人間として』に発表（1971年，筑摩書房刊），以後作家生活に入る。
1975年，岡百合子夫人との間の一子真史君自死。それ以前から「歎異抄」を読みつづけたが，深い悲しみを契機にいっそう親鸞に親しむ。著書に「生きることの意味」「一粒の涙を抱きて」他。百合子夫人との対談「いのちの行方—人間とは何か」および本書第一部「少年の闇」は径書房刊。

青春無明　歎異抄との出会い　第二部

一九八三年一一月三〇日発行

定価　一四〇〇円

著者　© 高史明

発行者　原田奈翁雄

発行所　株式会社　径（こみち）書房

東京都千代田区三崎町二—一三—五　影山ビル
電話　〇三—二三四—四六〇八（編集部）
〇三—二六三—七〇一九（営業部）
振替口座　東京一—三二七二六

印刷　明和印刷株式会社
京美印刷株式会社
製本　株式会社　積信堂

0093—0010—2507

青春無明

歎異抄との出会い 第二部

高史明

目次

黒闇を行く　5
燃える業火　91
無明長夜　181

装画　前田常作

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

黒闇を行く

一

劫濁のときうつるには
有情やうやく身小なり
五濁悪邪まさるゆゑ
毒蛇悪龍のごとくなり

（正像末和讃）

黒闇の彼方から、少年たちの呼び声が谺してくる。おーい、おーいと少年たちが、私を呼ぶ。Gは死んだ。死んだGが、私を呼んでいる。Fは日本を去ったと聞いた。Oはいま、何処にいて何をしているのか。

少年たちはいずれも、私が東京に出てから知り合ったか、東京に出てきた当初に私の身辺にいた者たちであった。その少年たちの声が、遠い過去の日々を思い返そうとする私の脳裡に谺してくる。私が東京に出てきたのは、まさに朝鮮戦争の前夜とも言うべき時期であった。いまにして思えば、東京の上空には、すでに目に見えない暗雲が渦巻いていたのである。とはいえ、それはなお私の目には見えていなかった。私の目に映った東京は、煤けて雑然としていたが、妙に明るかったと思う。焦土という言葉がある。戦争から生れてきた言葉であると思うが、焦土と化したといわれる東京の表舞台から、焦げた土はすでに姿を消していた。緑が繁っていた。大きな駅の周辺には、バラックの闇市が建ち並び、そこに出入りする男や女の表情にも、くすんでいたとはいえたしかな明るさがあった。

この妙な明るさを、私は何と呼べばよいだろう。目に見えない暗雲のひろがる空の下のくすんだ明るさ。いまの私には、そのくすんだ明るさの上を覆いつくす暗雲が、どす黒くはっきりと見えるのである。暗雲ばかりではない。くすんだ明るさの陰に隠れた涙や傷までが、はっきり見え

てくる。そして私は、その遠い日々を思い起そうとして、すでにくり返し唱えてきた親鸞の和讃を、ふたたび思い返さずにはおれないのである。「劫濁のときうつるには……」劫濁とは、時代と社会環境の濁りを指す言葉であった。戦争は、その濁りそのものであった。その戦争が終った。しかし、濁りは静まっていなかったのではないだろうか。

親鸞が「劫濁のときうつるには……」と詠んだのは、日本の中世という時代におけることであった。まさしくそれは、劫濁の深い時代であったと言ってよいであろう。貴族社会は、崩壊しつづけていた。戦乱が相次ぎ、全国的な大飢饉にも、くり返し見舞われている。さらに、二度にわたる蒙古の襲来があった。その時代から、戦後の時期までには、ほぼ七百年近い歳月を数えることができる。人間はこの間、一日の休みもなく、その歴史を積み上げてきたのである。時代は、その時とともに変遷してきた。社会や生活も変った。だが、それはそのまま時代の濁りを、深めてくる歩みであったと言えば誤りであろうか。いまの私には、あの妙な明るさもまた、濁りであったと思えてならない。末法という言葉が思い返されてならない。

その濁りの中に浮いた自分の姿が、いま遥かな過去の黒闇から浮び出てくる。「有情やうやく身小なり……」まさしく黒闇の中から浮び出る私の姿こそ、「身小」そのものであったと言うほかない。東京に着いたとき、私はあの朝鮮人学校に通っていたときと同じ恰好をしていた。つん

つるてんの学生服を身につけ、大きな頭に小さい学帽をちょこんとのっけていた。その姿こそが、「身小」というにふさわしいのである。体が小さかったのではない。その姿に表われ出ている心のありようが、身小であった。「身小」とは、まさに心のありようを指しているものであろう。心に毒蛇悪龍を潜ませつつあったからこそ、身小なのである。その私を呼ぶ声が、いまいっそう強くなってくる。おーい、おーいと彼らが呼ぶ、その彼らの声の中から、Xの声がひときわはっきりとしてくる。Xは、私と一緒に東京に出てきた男であった。四角い下駄を思わせる顔をしていて、その大きい顔を支える首が太かった。肩が張っていた。胴体が長く、足が短いわりに、張り出した両肩から垂れる両手は細く、長かった。朝鮮人学校では、悪童仲間の一方の旗頭と見なされていた男である。私は、このXと一緒に東京に出てきたのであった。どちらも、朝鮮人学校の劣等生である。そうであったからこそ、東京に出て、一廉（ひとかど）の人間となって、汚名をそそごうという相談がまとまったのである。丁度、私がもはや家にいることはできないと思い決めていたときであっただけに、二人の相談がまとまるのも早かった。

　そのXの声が、いっそうはっきりと聞えてきて、ついにその四角い顔と体の全体が、私の目前に表われ出てくる。

「おーい。大変だぞ！……」とXは、私に向かって言う。

その日、Xと私は、新宿のある旅館に宿を取っていたのだった。その宿は、私たちの身分からすると、立派すぎる宿であったと言える。私たちが、財布の中味を無視して、その旅館に行ったのは、一度は旅館というところで泊ってみたいという好奇心からであった。さらに言うなら、後のちの窮乏生活を予想して、せめて金のあるうちに一度だけでも、人並みに宿に泊ってみたいという思いもあったと思う。Xが素頓狂な叫びを上げたのは、宿に入って間もなくのことであった。いましがたお手洗に出ていったと思うと、慌てふためいて駆け戻ったのである。Xは、四角い顔の中の細い目を吊り上げてくり返した。薄い唇を震わせながら言う。

「大変だぞ！　えらいことになった！」

「どうした？　何だァ！」と私は驚いてたずねた。

「水だ！」

「水？」

Xは四角い顔を、いっそう角張らせた。

「便所の水だよ！」

「便所？　それが、どうしたんだ？」

「止まらねえ！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「止まらない？」
「洪水になりそうだ！」
私はやっと、Xの狼狽ぶりの原因がのみこめた。Xは便器の中へ、どっと水が走り出て、それがいまにも溢れそうだと言うのである。私は、ほっとすると同時に思った。こいつめ！　水洗便所なんかに驚きやがって！　私は一度浮かしかけた腰を落ちつけた。私は、Xの金を持たない同行者であった。せめて物慣れたふりをすることによって、Xの力になる義務がある。私は、Xを見上げて言った。
「おまえな、それは、水洗便所というものなんだ。おまえ、水洗便所を知らんのか」
「知っているよ！」とXは応えた。
「もう一度よく見ろよ」と私はつづけた。私もまた、水洗便所には慣れていなかった。それだけにいっそう落着き払っている必要がある。私は、さもよく知っているかのような口吻(くちぶ)りで言う。
「もう、止まっているだろ。あれは、水が自然に止まるようにできているんだから……」
「そんなこと、おれだって知っているよ。それが止まらないから、言っているんじゃないか」とXは言う。
「とにかく、行ってみな。もう止まっているだろ」

Xは半信半疑という顔つきである。それでも、行って見ようという気になったらしく部屋を出てゆく。が、すぐに駆け戻ってきた。彼は、まるで私にすべての責任があるかのような口調で言う。

「まだ出ている。もう溢れそうになっているぞ！」

瞬間、私は思わず腰を浮かした。Xはつっ立ったままつづけた。

「どっと、どっとと音をたてているぜ。あれは故障だ！」

私はすでに立ち上っていた。Xの横をすり抜けて廊下に出る。右手の方向四、五メートルほど向こうに、明け放しの扉があった。その扉の内から、水の奔流する音が溢れ出ている。あいつめ！　田舎者が！　水洗便所も知らんと、変なところをいじりやがったに違いねえ！　私は声のない怒鳴り声を上げながら、その扉に駆けよった。見ると、まっ白い便器の中を、Xの言葉どおりに透明な水が奔流していた。激しい勢いであった。私はくるりと向きを変えると、まるで溢れる水に追われているかのように駆け戻った。

「あれは、故障だ！　おまえ、女中に言ってこいよ。早くせんと、廊下が水びたしになってしまうぞ」

Xは、私の言葉が終る前に走り出していた。私はXとは逆に、部屋に戻った。後悔が、いま目にしたばかりの水の勢いそのままに、頭の中を駆けめぐった。こんなところに来るんじゃなかっ

たという思いにつづいて、事故の責任を問われて、弁償しろと言われたらどうしよう、という不安が起ってくる。軽い財布が心配になった。間もなく、廊下の向こうから、人の高い話し声が聞えてきた。Xの声に混って、女中の声も聞える。女中の声が、甲高い笑い声に変った。その笑い声が、部屋に近づいてくる。やがて、顔中に笑いを溢れさせた女中の円い顔が、戸口にあらわれた。

「心配いりませんよ。故障じゃありません。放っておいたら、自然に止まりますから」と女中は、楽しそうに言う。

私は、何も言わなかった。Xもまた、女中の横につっ立って黙っていた。女中は、その私たちをいま一度、面白そうに見較べて、帳場へ戻っていった。便所の方は、ちょっと覗いて、明け放しの扉を閉めただけであった。Xと私は、女中が去った後、思わず顔を見合せた。無言のまま、二人そろって便所に向かう。扉の中を覗きこんだ。不思議であった。さっきまで、激しい勢いで奔流していた水が、ぴたっと止まっていた。まわりに水の溢れた気配もなかった。あの奔流していた水は、みんな何処へいってしまったのか。まっ白い便器の中には、わずかばかりの水が残っているだけで、その水面に黄色い電気の光が浮いて、かすかに揺れて静かであった。私たちは、便所の前で、もう一度目を見合せると、無言のまま部屋に戻った。あれが、水洗便所というやつ

か！　私は心の中に思った。Xもまた、同じ思いを抱いていたのか、どうか。
「ちぇっ！」どれほどしてからであろう。Xが強く舌を打ち鳴して言った。「あの女中め！　げらげら笑いこけやがって！　あんなに笑わなくてもいいのによ。こっちは、故障だと思ったから、親切に知らせに行ってやったのに」
「ほんとだ！」と私も言った。
「田舎っぺえがって顔をしてよ」とXは言う。
「それにしても、凄い勢いで水を流すものなんだな。きれいな水をよ。もったいないったらありやしないな。糞を流すのに、呑み水と同じ水を、あんなに流すんだからな」
「それよ。目の前に、何か垂れ下っていただろう。用がすんでから、それをいじっていたら、急に足元からジャッと凄い勢いで水が出てくるじゃないか。あれじゃ、誰だってびっくりしてしまうよ」
「東京に出てきて、お互い一つ勉強になったな」と私は言った。
　私たちは、ふたたび顔を見合せた。互いに相手の顔から、不安の影の消えているのを確かめ合う。私たちは静かに苦笑し合い、それからどっと弾かれたように笑った。あの笑いは、何であったのだろう。私たちの身が、すでに深く濁りに染まりつつあったのは確かであった。とはいえそ

の「身小」というほかない身に、なお笑いがあり、汚れを弾き飛ばす力があったということであったのかも知れない。私たちは、まだ若かった。濁りの中にあって、その全身を深く濁りに染めつつあったとしても、なお笑うことができたのである。それはしかし、視点を変えて見るなら、私が濁りの中にあって、自他の濁りをなおはっきりと自覚していなかったということではなかったろうか。黒闇に包まれていながら、黒闇をそれと意識しなかったと言うことである。東京に出てきた当初、私はこの黒闇の中を、ただ若さのみを灯として歩んだのではないかといまは思う。自分が、何処に向かい、何に出会ってゆくのか、私にはまったく予想つかなかった。この黒闇の中を歩んで、やがて行手に、かすかな灯が見えてくることとなるのだが、その灯がまた、私にとっては、いっそう深い黒闇以外の何ものでもなかった。それはしかし、いまはまだ触れるときではない。いまはともあれ、東京に出てきた当初のことを、もう少し振り返っておきたいと思う。濁流に浮いた泡沫は、自からその身が泡沫であることを意識せず、何処に向かっているのかもわからないまま、黒闇の中を流されて何処に流れつくことになるのか。

二

翌朝、私とXは、逃げるようにして宿を出た。その足で、貸間を探し歩くことになる。もう、宿はこりごりであった。私たちは、一日中歩き回って、N区の外れにやってきた。はじめから、N区を目標に定めていたのでなく、少しでも安い間代の貸間をと探し歩いていて、いつの間にか新宿からNの方へとやって来たのである。

N区の外れで、私たちは安い貸間を見つけた。その日、私たちが見て回った何軒もの貸間のうち、その貸間は、もっとも安い間代であった。それが私たちの気に入った。そのかわりこの貸間は、他のどの貸間よりも粗末であった。文字通りのボロ屋である。屋根が、黒いトタン葺きであった。まわりの壁は、薄い板を継ぎはぎに張りつけたものである。しかもこのボロ屋には、先住の三家族が住んでいた。部屋の仕切りは、ベニヤ板である。先に住んでいた中年の夫婦者が、自分たちの使っていた二間の境をベニヤ板で仕切り、三畳間を自分たちが使い、六畳の方を、私たちに貸してくれたというわけである。天井には、大きな雨洩り跡が、幾つも広い地図模様を描き、障子は煤け、破れがひどかった。それでも私たちは、満足した。身に合っていたということであろう。少なくとも、ここでは、水洗便所騒ぎが起きる心配はなかった。その上、間代が安い。ついでに言うなら、この年、大都市への転入制限が解除されている。四軒に一軒は家がないという状況の中で、疎開先から大勢の人々が東京に帰ってきつつあった。ボロ屋であっても、安い間代

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.